

でも、「昔々」などと云ふお伽噺を聞きながら、うとうと眠つた経験のない人はなからう。其の間に、色々たくましくした理想を成長せしむる萌芽となつたのかも知れない。又母の膝の上で乳房をいぢり乍ら聞かされた「お天子様には忠義をつくさねばならぬ」事や、「花咲爺の犬はお爺さんからよく可愛がられた平生の恩を思つて、黄金のありかを教へた」事や、「慾張り爺さんはとうとう牢屋につながれた」事やが三つ子の魂百迄で、よい加減背丈延てから理屈でこね上げた道徳思想よりも、ごんなに有力に人間を支配するかも知れないと思ふ。それにもかゝらず、今日の有様を見ると、お伽噺を研究して居る人と云つては、少年少女雑誌の記者か、さもなければ二三の専門家であつて、肝心の教育者の位置に立つて居る者は、まるで他人の事の様考へて居る。今後は、他の領分だと云ふ様な考をもたないで、専門家と歩調を揃へて、學校の教師も、家庭の父母も、慎重な態度でお伽噺を研究して、家庭へも、學校へも、ごんごん取り込んで、子供にうるほひのある興味を絶え間なく與へたいものである。近來歐洲

では、修身科の教材に、お伽噺を用ふることが盛になつて來たさうであるが、好結果の得られることは云ふ迄もない事だと思ふ。我國に於ても、徳目に配合していや味のない、美しい興味あるお伽噺を作つて教材に用ゐる様な日が、一日も早く來てほしいと思ふ。(文一ノ四 田中、長手、植田、野田、久保)

叙事詩としての平家物語

平家物語は、日本文學中誠に立派な作品の一つであつて、只今の流布本六巻を通讀して一つのまとまつた叙事詩と見る事には何人も異論はないやうである。たとへば、一曲の音樂の如く、しかもそれは、起筆第一にある祇園精舎の鐘の音の、幽かに空氣を動かしたつ、流れゆくやうに悲哀の調に涙ぐむばかりの情調を動かす所が、平家物語の基調 *Main tone* であるやうに思ふ。しかしもし音樂にたとふるとしたら、一音調にも、高低・大小・強弱の音色の變化があるやうに、平家物語の與ふる音律にも、起伏波調などがある事も、また直ぐ氣づく事である。故に、平家物語全篇を一つの叙事詩として見れば、恰も耳の練れた人が、音樂を樂しむ時の心で、其微妙變化の跡を尋ねて、熟讀して味つて見やうと思ふ心から、其開展の有様を尋ねて見たいと思ふ心が起つて來る。

此考は何人もある事と見えて、只今まで此の問題

に觸れたのは二通りある、

1. 山田氏

- a. 清盛を中心とせる前卷(卷五の終りまで)
- b. 義仲を中心とせる中卷(卷六より卷三まで)
- c. 義經を中心とせる後卷(卷八より卷十まで)

2. 内海氏

- a. 清盛を中心とせる前卷
- b. 平家没落を中心とせる後卷

とされた、私どもは直接には此の見方の判断を目的とせぬ、唯全篇を讀み了つて、何んとなく其の文書批評的の乾涸と、印象批評的の茫漠とに、軽い反感を禁じ得ないのである。此の感じをお話する爲に、まづ平家物語の大体を通觀した我等の平家物語を映現せしめねばならぬ。

忠盛時代の平氏は、武人として大層卑しめられ、彼が内の昇殿を許された時など、公卿殿上人は心よく思はないで散々彼を恥しめやうとたばかつた位であつた。

所が清盛時代になつてからは、保元の亂、平治の亂と云ふ、大波が、平氏を乗せて、一躍最高所にまで運んだのである。丁度忠盛に於て、幽かに起つた音は次第に振動を大にして來て、今や漸く佳境

に入つた、そして微妙な域に曲は進行しつゝあるのだ、此の音は清盛を中心として流れて居る音で、「禿童子」、「祇王祇女」、「殿下乗合」、さては高倉帝の御即位などは、其の間のあやである、一門の公達は、榮位高官に昇つて唯酔されて居る、「當今平氏にあらざれば人にあらず」と豪語する程の得意があつた、民は皆泰平を喜び、平門の繁榮を謳歌して居るやうに思つて居たのである。

けれども吾々は此處で靜かに耳をすます時、妙音許りでなくて其の底の方に幽かにしかも高低をなしつゝ、常に雅音を掻き亂さんとしつゝある音を、認めぬわけには行かぬ。これは即ち僧兵の横暴と鹿ヶ谷の謀叛とである、漸く穩かなる波面は波濤が起つた。直情經行自家在亡の爲には何事をも敢てして憚らぬ清盛入道は、自分がきづきあげた礎に、龜裂を拵へた彼等謀叛人を、忽ちに根こぎにしやうとした、其の的にかげられて、成親は配所に殺され、俊寛・康頼・成經は鬼界島に流され、剩へ俊寛をば人生の暗黒面に葬り次で有王の島下り云ふ悲劇が織り出されたのである。かくて、清盛は悪虐無道の惡僧として出來上つた。此の様にして雜音を取りしづめ平氏は、またもこの佳境に立歸り、更に一段の興に進んだのである、其最高調は皇子の誕生であつた、清盛は感極つて嬉しさに、座躍して泣いた、平家一門の人々には世は漸くこれより云ふ得意さが生れたのである。けれども已に發展すべき音調ではなかつたのである。實に喜びのかけに悲しみあり、榮耀の奥に凋落あり、今やたゞならぬ暗いかげに暗々の中に動きつゝあつたのである。上りつめた龍は下らねばならぬ。世の人を巻きこんだ音楽、酔はせた妙音は、漸く衰へはじめるのである、而してこれを著しく早めた物は實に重

盛の死である、彼は一門の人が歡樂の夢の中にある時、已に榮華の裏面を洞察した。彼には覺めたる人の悲しみがあつた。

一体清盛は熱情の人である、理想が主義か云ふ冷やかなものはない、強いて云へば、自家一門の繁榮が終始一貫した理想であつて、それに當つて何物も省りみないといふ事は主義であつた。たゞ幕地に走つた、平氏が僅か十年足らずに、此の地位を作つたのも、一には時の産んだ物ではある云ひながら彼の性質がよく時に乗じて、これを操つたからである。處が重盛は、理想の人であつた、それ故此處に悲しい父子の衝突は絶えなかつたのである。小教訓大教訓は重盛が理想に照して父の行を見た時に涙と共に迸り出たものである、けれども彼は到底父を根本的に自分の理想に立たしめる事は出來ないのを見て、遂に熊野祈願して死を早めたのであつた、嗚呼彼は弱つた、平氏に取つては有り難い人ではなかつた、此の時に音はやゝ沈みかゝつて來た、今や入道の眼が輝いても運命は傾斜の際に臨んだのであつた。

重盛の死後は入道の我儘の時代である。作者は入道を悪く取扱はふ義務であるが、彼の道理なきふるは方々に現れてゐる。ここに法師問答の段には最も彼の性情がよく出てゐる。重盛の死に對して朝廷の同情なかつた事を怒つてゐるのは、一寸讀者を動かす。「七代迄は此一門をば争か捨て給ふべき」といつて、己の老いゆく時にあたり、稍もすれば平家を傾けんとさるゝ朝家を怨んでゐる。道德の制裁から放たれた入道は、まづ大政大臣師長を東國へ流した其他多くの公卿の官を止め、或は都を追ひ出した。その上法皇鳥羽殿へ幽閉の事あり、聞く者をして不快を感じしめるは、音色は變つ

てゐる。この音の中心に立つてゐる宗盛は、振幅まち／＼にして怪しくなつてきた原音を、維持するには餘りに凡庸な人であつた。世の中は次第に凄じくなり、盛な人も家を出で、遁れる者が多く、心ある人は澆季の世なりと歎いた、最後に亂れて消滅する兆は已に見えてゐた。しかし、何と言つてもふの大きな音の、消滅するにはほんの爪で弾いた音の靜まる様に、そんなに早くはかたづかなかつた。丁度晩夏の陽は暑く照つてゐるが、何處さなく、底を流るゝ秋のけはひの見えてきたといふやうな感がある。

高倉院の二度の嚴島行幸、安徳天皇の即位により、音は稍高くなり誇りに振動した。ところがこれに大きな横波をもつてきて、騒がせたのは頼政である。頼政は横暴なる平氏に依つて築かれた朝廷に、唯一人殘された源氏である。源氏は僅にこの人によつて、朝廷に生命を保つてゐた。それで妬みもあり、又木下の事件もあつて以仁王を誘ひ、大事を起すに至つた。ふの横波は時期が早過ぎたため頼政は「埋れ木の花咲く事も無しに、身のなる果ぞ悲かりける。」といふ一生を振り返つた時の、哀れな歌を残して自殺した。以仁王は悲惨な最後を遂げられ、七才の若宮までもこの波は巻き込んで了つた。突然原音に狂を起させた波は靜まつた。しかしこの波は後々までの邪覺をしたのである。

原音の裏には色々雜音が聞えず出して、ごうかすれば之を掻き消さうとする。三井寺は煙さ化した。次第に弱く悲しい音を立てつゝ、原音は緩い／＼傾斜を徐々さ下りて行つた。入道の心に風波の起つたのも確である、南都北嶺を恐れて、四百年の古い礎は動き、都は福原に移された。京中の人は悲しみ怨み舊都に名残を惜しむた。徳

大寺實定卿の心情、こゝは、當時の人心をよく寫したものである。舊き都を來てみれば、淺茅ヶ原さぞ荒れにける。月の光は隅なくて、秋風のみぞ身にはしむ。」さよく眞情を語り實景を寫してゐる。かうして入道は絶えず人心に反對した。しかし、此間福原には怪しい事が續出して、鋭敏な當時の人心を刺戟し世は騒いだ。一波去りて一波來り、その度に原音は音色を更へ悲鳴をあげた。

次に伊豆の海から大波が寄せてきた。頼朝は流人である、かの背後には大立物なる文覺といふ荒聖がある。彼は草も臆がぬ六月の頃、藪の中で毒蟲にせめられ、風凍る十二月の一日那智の瀧壺に沈んで荒行をした。又高尾の神護寺の設立を思ひ立つて、法皇御遊の堀の内に押入つて勸進帖を高らかに讀上る迄は、最も彼が活躍してゐる。流された頼朝を助けて盛な平家を倒さうとした。後に頼朝の天下となつてからは、この音の末段となる六代を助けた。こんな所を見るに江戸時代に流行した、俠客だの男達といふやうな感を思はせる。彼は實に不敵な荒聖で、平家の後段に於て強い異彩を放つて音を面白く亂してゐる。若い頼朝を説くに、一觸黷を以て來て父義朝なりと稱し、勸勤の身を顧みず、院宣を乞ひに行き七日の内に遙々さ伊豆へ戻つてきたといふ、此熱狂的な仕方、頼朝を動かすに充分であつた。この豪膽な肝魂の強い荒聖は、遂に平家最後の大動亂を起すべき、譬へば地震といふ地下の大鱧のやうな者であつた。

この大波と宗盛は富士川で戦はねばならなかつた、その結果は水鳥の音に驚いて逃げ、後の世の物笑ひさなつて了つた。この時の平家は已に憶病さなつてゐたのである。都遷りに入道世の非難を押し切つてやつてみたが、撃横紙破りの入道もさう／＼我を折つて、半年

の後都は歸つた。この間の遊は實に秋の木葉の落つる様であつた。この混亂はつまり入道自身の混亂である。興福寺の僧徒も伽藍も焼け、帝は之を聞召し御憐重らせ給ふて崩御になつた。平穩に見えたのは表面のみである。小督はこの混亂の中に美しい色彩をそへたものである。帝の寵を一身に集めきらびやかな禁庭生活をしてゐたがこの裏面には、飽かず別れた行隆といふ夫があつた。こゝにも人情の悲痛な暗流が流れてゐる。小督或夕ひそかに宮を出て了つて後、帝は戀慕の情に沈ませられた。仲秋の夜彈正の大弼仲國は寮の駿馬にまたがり嵯峨の邊をたづねる、この物語の中で、秋の夜、片折戸、想夫戀といふものが背景となつて小督を益々美しく悲しくする、若く優なる君、美しい小督と入道との對象は、慘酷なまで色彩がはつきりしてゐる。此のロマンチックな物語は平家を通して一層色を深くする。平家の波の上に起つたバイブレーションである。漂ひ流れた一つの花である。入道は美しい可憐な花を揉み散らす春の雨にも似てゐる。入道の權威と自我主張ともよく見るこゝができ

る。さて風波の押寄する天候はずつと前から見えてゐたが、雲はまづ木曾の山に亂れた。義仲の信濃に於ける二十余年の生活は果して平家に何を意味してなつたであらうか。鎮西四國の飛脚は踵をついで來り、平家に叛くを告げた。長い間潜伏してゐた波は漸く頭をあげ、弱りかけた音は落ちて行く計となつた。榮えたもの、免れない、最後の來るべき運命に達着しやうとしてゐる。淨海の滅そはこれを早からしめた。入道は強者として死んだ。六十餘年の生を顧み

ふ弱いものは勿論なかつた、現世をはなれ得ない彼は、頼朝の首を吾が墓前に捧げよと遺言して死んだ。彼の一生は實に偉大であつた、強かつた、氣持のいい、程一貫し何處までも徹底してゐる。二月の寒い日この偉大な生命は亡びて行つた。すべての人と同じやうに、淨海の死といふ事は當時の人心にざればこの感激と、悲痛とを與へた事であらうか。

淨海入道が死んでから、平家はますます動搖し初めた。今まで裏面に小さい漣波はたつて居たが、強いはでな調子でつゞいた音楽は、之から大きな横波がうつて來た。壽永二年の春平家は其の勢十萬餘騎で堂々木曾征討に出かけた、恐らく之が平家の最初の、しかも最後の、立派な出陣だつたであらう、この時のかの清盛の遺言は貫徹しなければ止まないといふ有様であつた、しかしかうして出た平家も砥波山の一戦に脆くも敗られた、實にこの戦は平家失敗の第一歩であつた、之から音楽は悲調を帯びて來た、この波にゆり出された犠牲者は齋藤別當實盛である、彼については有名な錦の直垂の話や白髮染の話が傳つて居るこの大きなバイブレーションの結果は、彼等の悲惨な都落ちとなつた、之が美しい平家没落の第一歩である。ゆられながらも強い太い調子であつた音楽はこれから弱くなり初めた、この没落の第一歩に美しい色彩を與へたものに維盛の悲惨な物語がある忠度のやさしい話がある。經正の琵琶の話もある。彼等は舊都福原に一夜を明して海路をたごつて九州にいつた、内裏を築いてこゝに先づ落ちつかうと思つた、彼等は緒方の謀反によつて、また此地をも追はれた。昨日は華かな宮廷に生活し今日は三界に身のたき所もなくなれない道を跣足で我先きに落ちのびた。

其のみじめな様はきらびやかな平家公達のテリケートな感情にはあまりに刺戟が強すぎた。清經の投身は其の事を表現するものであらう。榮えた平氏がかうした悲調にさまよつて居る間に新らしくおこつた義仲は、都には入つた、しかし彼は平家のあさなうけて朝廷にたつて入でなかつた忽ちにしてあのかない粟津の最後を見なければならなかつた。「主上にならまじし上皇にならまじし」といつた義仲は生々とした血を以て榮えた平家をかきまはしたにすぎなかつた。急に横から出た音は急に高調に達して急に細く消えていつた、恰も大きなこの音楽の運命を豫言するかのやうに。義仲の名をきいた丈ですぐ思ひ出すのは彼の女丈夫巴御前の事である、彼は新しい女であつたやさしい平安時代の女から武家時代の女にうつる過渡期の先がけをした女であつた、彼は平家の女ではなかつたやつぱりあの痛快な一時的な歴史をのこして去つた、義仲を背景としてこそ尤も美しいものであつたであらう。かう京師が動搖して居る間に平家は一度勢を盛り返して一谷に據つた、一度細く弱くなつた原音が精強くなりかけたがと思ふさまもなく又々大きな横波がうつた、そうしてこんごこそ恢復の出來ない悲調な細い弱い音にしてしまつた、この大打撃をあへたものは義經であつた、そうして其の第二の没落を色どつたものにあの有名な敦盛がある、歌で名高い忠度もこの時に戦死した。

「行きくれて木の下陰を宿させば花や今宵の主ならまし」これは彼が討たれた時に、籠に結つけられてあつた歌で後世に有名な歌である。平家はかうして滅ぶる際にもなほ風流をわすれないで美しく花の様になつた、これでこそ樗牛も「源氏として榮えんよりはむしろ

平氏として亡びん」といつたのであらう。この大きな振動で細く弱くなつた音はもはや再び強くなる時はなかつた、次第に細く弱く遂に消えればならなかつた、この後の平家にはあまり大きな波はうたなかつた、即ち一の谷の戦はこの音楽の最後の最も大きな振動であつた。

波の次第に下りかけた時維盛の事がある。彼は恩愛の情細な純平安朝式の公卿である。而も自分の家は武家である。武によつて立た平家は武に由つて亡されんとしてゐる。が全く平安朝化した彼等は戦ふ爲には餘りに弱かつた。而て京に残した妻子戀しさに屋島の陣を抜け出して京に入る途中高野に詣でて出家したが、後熊野沖で入水する迄妻子の事を口にした。

又其頃高野に瀧口入道と云ふ聖がある。自分の思つた女と結婚する事が許されないで、夢幻の世の中に見にくき者を片時も見て何かせんとて出家してしまつた。夢幻の世中には平家の公達の生活の様式であつた。だからスリートな夢の様な生活をするにはふさはしい都人であるが武に於て源氏に敵しなかつた。それでこそはかなき滅亡の歴史を留める事になつた。平家と云ふ樂はこの邊から益々亂れて來る。

此時朝廷は三種の神器と捕へた重衡と取換へ様とされた。しかし三種の神器は彼れ一個と交へらる可き物でない宗盛も拒んだ。二位尼の威力にも後白河法皇の権力にも神器の尊さは絶對である。夫義仲が鎌倉の大軍を防ぎかれて平家と和睦し様とした時にも、平家は神器を奉るまで之を拒絶した。國家的精神の美しい現れである。みもすそ川の流れる國は亂れても尚和やかである。

那須與一が扇の要を射た話は平家物語中誰でも知てゐる事であるが何と云ふ美しい話である。人は平家物語を詩史だと云ふが平家其物が一篇の詩ではあるまいか。ちようご榮華と驕慢になれたクレナパトラが毒蛇にかまして死んだ様に平家はこの時まだスキートな其夢から覺めない。

壇浦まで来て平家の波は形を全く改めてしまつた。さにかく下りかけても此邊迄は傾斜がゆるかつた。こゝで二位尼が神器を奉じ主上を抱き參らせて入水した事により急轉直下した。傷付いた牝牛の様に荒れ狂つた能登守。終を全くして從容死についた知盛は最後を飾る華なエピソードである。平家と云ふ大きな家はもろくも倒れた。平家物語といふ大曲は先づ終へた。今や終へんとして長く余韻を引いてゐる。此時また新な倍音がそつた、即義經と六代との事である。

義經は源氏の爲國の爲大功を立て意氣揚々身の功に代へても命丈はと宗盛父子に誓つた。その義經を頼朝は鎌倉にだに入れて罪なきの罪に泣かせた。彼が一度京を落ちては「戦はひた攻に攻めて勝ちたるぞよき」と豪語した昨日の將軍は身の置所なく終に失はれた。義仲を倒し平家を亡した人が同じ運命に終つてゐる事は私共はその間に潜むサムシクについて思はずにおられない。まして佛教信仰厚き當時の人はどれ程感じたであらう。彼の最後は仕事が大い丈に一層人心に強いショックを與へる。平家物語の末に強い倍音として曲を複雑ならしめてあると云はれる。次に六代のことば弱い余韻を美しいロマンチックな気分にとよばせた。文覺により不思議の命を助つた六代は「十四五にもなり給へばいさみ形美しう邊り

つて底を流れて居るのは脈々としてつきない平家の運命であつて木曾はそれにショックを與へる他の波である、終りに平家没落にあつて義經が出て來て如何にも其の性格と武士的氣質とを現はして居るが今までつと流れて來た波の最高調に達して、次第に下りゆく時に更に横から現れた第二の横波であつた。後者は全盛と没落との二つに分けるが、これらはつきりと何處から分けてよいかは元來が一續きのものなのでわからない。強いてわけると六卷から最後までを没落時代とするより外に仕方はない。併しながら前にも云つた通り平家物語は興隆から滅亡に至る音楽であつて切れるものではない。全篇を通して一つの大きな詩として見る所に平家物語の無上の價値は存するのである、この流を本として大波小波の錯綜するところに無限の趣味がある。もしこの詩に段落をつけて見るならば、三卷の「燈籠并大地震」の所から前を平家の興隆時代とする。そして流布本の法印問答といふ題目を入れる。それ以後を平家衰亡時代として二大段にわけると此處は重盛が死んで入道も片翼を落され平家の衰へるもどくなるから

もてり輝くばかり」になつた。母は「世が世にてあらましかば近衛司にてあらむする物を」と歎いた十六の時出家して後文覺が謀反して流された時斬られた。之で平家の子孫は永く絶えた、全篇に起伏した大波は之で絶えた。しかしまだ最後に小さな裝飾音とも見られる建禮門院の御事がある。

女院は浮世を厭ひ誠の道に入らせ給ふても心細き日を京の片邊寂光院に過ぎた。一夏白河院が御幸あらせられた時の御物語がかの有名な六道輪廻になつてゐる。そしてまもなく一期を遂げられた。桓武天皇に出次第に時の利を得て僅數代で國の半を己が莊園とした平家は一炊の夢にも似てゐる。榮華の限りをつくしたが清盛の死するや忽ちにも似ても瀬戸内海の波に洗んだ。而して絶わかれしたまの緒は都はなれし小原の地にあるかなきかの様に續いたが秋の虫の聲が何時となく絶える様に物靜かに女院の永き眠りにつかれた時最後の偉大な寂靜となつた。天下の人を酔はせ天下の人を泣かせた曲は最後まで色彩に富む餘音を長く引きながらそこに只一の裝飾音を以てこゝに聲なきの聲を残してついに絶えた。

以上叙した全篇の移り行きを見ると、此の物語は三つの中心人物を基として書いたものではないと思ふ。従つて人物を中心として三つに分つのは叙事詩としての感想を切斷する。全篇を通して前の方が清盛を中心として平家の華やかであつた時代を叙して居るのは明かであるが、中曲に於ける義仲は平家の大きな變轉を叙する爲に横から現はれた一の力であ

であるがこれから引續き「院宣の事」までの葛藤混亂怪神恰も「嵐」のやうな不安動搖の曲を見落すのは此の物語を味ふ仕方でない。どうしてもこゝに中曲を見ねばならぬと思ふ。それから最後の全体を平家がだん／＼と落ちて行く急轉直下の悲調と見る。「灌頂の巻」は文章の方から云へば勿論中の方に入るべきものである。しかし流布本で「灌頂の巻」を最後に讀む時には一篇を流れる無常觀又低く響いて來て急に高くなりつと消えていつた大きな音の餘韻として誠に感じが良い。音の最高調は清盛である、重盛もなほ盛であつた其の音が少しづつ弱くなつて宗盛までいつた時には、もうかなり弱く少なくなつて居た。次に維盛となり音はますます弱くなる。そして最後に消えた所は六代である。さしも大きかつた勝れた樂の音は六代に至つて絶えた。野寺の晚鐘でさへもその餘韻は嫋々としてしばしは消えない。況してやこれは日本國中に鳴り響いた鐘の音である。餘韻は長く長く續いた。あるかなきかに唸つていつた最後が「灌頂の巻」である。祇園精舎の鐘の聲にはじまり六道輪廻の餘韻嫋々のところでもつ

て平家一篇の詩は終つて居るやうに味ふことも出来る。併し「灌頂の巻」は別の事としてもどうも平家物語全篇の調子が三度變つて弱い音から強くなつて強い音が様々に亂れて、それから急轉直下すと沈んだ音になつて行く音樂のやうに思はれるのである。さうすると我々がまとまつた文章として流布本を讀む時には、その變化を認めることが出来るのではないかと思ふ。かういふ感じの上から平家物語を味ふ時に以上の二つの學說に對して、我々の印象を主としてこの感想を述べて見たのである。「文學批評」上の根本問題に就いて多少の疑問を懷きながら、この考をのべて教へを乞ひたいと思ふのである。

(文三、重松、渡部、赤木、重松)

□奈良 良

嫩草山も 春日野も 霞こめたる 春景色、
舊き都の 名残さて 花は昔の 色にさく。
古人曰へらく、

「奈良七重、七堂伽藍八重櫻。」

大佛殿に 佛燈の

光は今も

輝きて、

正倉院は 天平の

昔をかたく

封じたり。

古人曰へらく、

「虫干や、甥の僧訪ふ東大寺。」

鹿の鳴く音に誘はれて

三笠の山を

放れけん、

満月早く 猿澤の

池の水の面に浮びたり。

古人曰へらく、

「仲麿の魂祭せん、今日の月。」

佐保の川原は水あせて

石にさくやく音靜か、

顧みすれば 葛城の

山の嶺

雪白し。

古人曰へらく、

「大佛を見かけて遠き冬野哉。」

御馬の嘶

尾上柴舟

木の葉散る音だにもせぬ大御苑かすかに駒の嘶きこゆ
神ながら神さびせすとわが大君冬の御苑に駒みそなはず
大君の御目に入らむと音たかく嘶え足掻き駒ぞいさめる
しとくゝと駒を砂ふむあやつりの人形のごと足をあげつゝ
赤駒に黒駒つゞさうちめぐる馬場の上をわたるかりがね
風のごと駒の走れば春霞流るゝなして母衣ぞ流るゝ
いくそたび駒は廻れどあらかねの土には這はずあはれその母衣
鐘鼓一つに鳴れば四十人ははやり切りたる駒うち放つ
駆けちがふ駒のあし音たじくゝに雹や戸をうつあらず球うつ
駒と駒さを争ひ蹴立つれば馬場の真砂雪のごと散る